

藤堂高虎の城造りに見られる独創性とその理念について

菅 祐 太

目 次

I. 序論	33
II. 本論	33
1. 藤堂高虎について	33
(1) 誕生から若者時代	33
(2) 豊臣家への仕官	34
(3) 徳川三代への忠誠	35
(4) 築城家としての高虎	36
2. 代表的な城郭	37
(1) 今治城	37
(2) 宇和島城	38
(3) 伊賀上野城	39
(4) 津城	40
(5) 篠山城	41
3. 築城における特徴	42
(1) 難攻不落と言われた石垣の高さ	42
(2) 弓の名手が苦勞する堀の長さ	43
(3) トリッキーな構造	43
(4) 機能重視の層塔型天守	43
4. 築城に見られる高虎の理念	44
(1) 津城と周辺の都市計画	44
(2) 高虎の理念	45
III. 結論	46

I. 序論

藤堂高虎とは、織豊時代と江戸時代初期にかけて活躍した戦国武将である。彼は、数々の主君に仕えたことで有名であったが、それと同時に築城の名手でも知られていた。数々の城を築いたが、私の故郷である今治市にも彼が築いた城が建っている。高校までの私は歴史などに興味がなく、まして今治を治めていた藩主藤堂高虎のことなども知らなかった。その私がなぜ藤堂高虎に関心を抱いたのか。以前、故郷である今治に帰省した際、ふと今治城内にある歴史博物館に立ち寄ってみた。そこでわかったのは、今治城にはこのような歴史があり、またこの城が波乱万丈の人生を送った藤堂高虎という人物によって築かれた、ということである。そうすると、いつも見てきたはずの城がなぜか違ったものに見えてきたのである。

それから、今治城のことについて少し調べてみたのだが、最も興味を抱いたのは今治城の構造であった。城の周りの堀に海水を流し込み、敵が来ても足止めをさせるという特別な造りで、海を最大限に活用した城である。日本三大水城の一つに数えられる今治城は、なかなか立派なもので素晴らしい城だったのである。この水城の例にもみられるように、築城の名手と言われる高虎がどのような独創性を持って、数々の城を築き上げてきたのか、彼の独創性とそれを支える彼の理念とはどのようなものであったか、ということはこの論文で伝えていきたい。

II. 本論

1. 藤堂高虎について

(1) 誕生から若者時代

1556年、近江国犬神群藤堂村¹⁾で少豪族・藤堂虎高の次男として生まれた。藤堂氏は先祖代々在地の小領主であったが、戦国時代にあって没落しており、農民にまで身を落としていた。幼名を与吉と名乗ったと言われている。

14歳の頃、近江国を治めていた浅井長政に仕え、近江浅井郡姉川河原²⁾で行われた姉川の戦いで初陣を飾った。浅井軍は織田・徳川連合軍に負けはしたが、その功績が認められ長政から感謝状を受けた。17歳の時、浅井長政が織田信長

1) 現在は、滋賀県犬神群甲良町在土あたり。

2) 現在は、現在の滋賀県長浜市野村町付近あたり。

によって滅ぼされると³⁾、浅井氏の家臣であった磯野員昌に仕え、80石を与えられた。この時代は、足利氏が将軍職を継承していたが、守護大名から発展した戦国大名が力を持つようになるに従って、将軍家の権威は失墜していた時代である。1573年は15代将軍足利義昭が京都から織田信長によって追放され、室町幕府が滅ぼされた年であるが、その2年後の1575年、磯野家を出て織田信澄に仕えるようになる。主君変えの主な理由は、戦いで功績をあげても主君からまったくと言ってよいほど認められなかったことである。報酬がとても少なく、馬を買うことさえ厳しかったのである。そして、自分をきちんと評価してくれるより優れた人材に仕えたいという考えが主君を多く変えた主な理由であった（表1参照）。

表1. 高虎が仕えた主君の一覧

高虎が仕えた主君	年齢（数え）	関連するエピソード
浅井長政	15～17歳	15歳で姉川の戦いに出陣する。初陣で武将を倒す。
阿閉貞征	17～18歳	戦いの中で一番の活躍をするものの報酬もらえず。
磯野員昌	18～20歳	無銭飲食をする。馬を買うお金がなかった。
織田信澄	20～21歳	80石を貰うものの報酬なし。優れた君主に仕えたいと思い始める。
豊臣秀長	21～36歳	すぐに才能が買われ300石に。32歳の頃、2万石になる。
豊臣秀保	36～40歳	才能を伸ばし、築城の力をつける。
豊臣秀吉	40～43歳	賤ヶ岳の戦いで味方が15,000人の敵に襲われた時、藤堂高虎は500人の家臣だけを引き連れて応援に行き危機を脱した。その時豊臣秀吉はこれほどの武将はいない。「もっと報酬をあげよ」と命令したと言われる。
徳川家康	43～75歳	53歳の時、伊賀・伊勢の領主となった。 「幕府に何かがあれば、一番に藤堂高虎を出陣させよ」と、家康に言わしめた。
徳川秀忠		
徳川家光		

出典：筆者が作成

（2）豊臣家への仕官

一つの転機となったのは、豊臣秀吉の実弟、豊臣秀長への仕官である。羽柴秀吉（豊臣秀吉）の毛利攻略に従って中国地方で戦っていたこの頃（1581年）、一色修理大夫の息女（久芳夫人）と結婚する⁴⁾。織田信長を討った明智光秀亡きあと、覇権を争ったのが羽柴秀吉（以降、豊臣秀吉と記す）と柴田勝家である。こ

3) この頃、お金のない藤堂高虎は餅屋にて餅を20個食べた、いわゆる無銭飲食である。しかし、餅屋の主人は怒らずに「東に行かず西にむかい親孝行をなさい」と助言した。その助言のおかげで、30年後、大名となった高虎は、餅屋の近くを通りかかった際、その時の礼を言い、多額のお金を餅屋の主人に渡した、という。

4) 高虎は正妻の久芳と仲むつまじく、戦国の世では珍しく一人の妻を死ぬまで愛した。しかし、高虎には子供がでず、藤堂家を無くしてはならないという思いから、不本意ながら側室を得たと言われている。

の戦いは近江国伊香郡⁵⁾で行なわれ、賤ヶ岳の戦いと呼ばれている。高虎はこの時 28 歳、この戦いに参加し抜群の戦功を挙げたため秀吉より 1,000 石、秀長より 300 石を受けて 4,600 石となった⁶⁾。31 歳の時、豊臣秀吉は九州平定のため島津氏と戦いを繰り広げたが、根白坂の戦いで島津軍に攻められた味方を救援する活躍をみせ、戦功により「佐渡守」と称するようになった。その後、紀州と四国平定の際の戦功により高虎は 1 万石が加増され、紀伊粉河 2 万石の領主に命じられた。高虎は、粉河寺境内脇の猿岡山に粉河城を築き、その後 7 年間、この地で過ごした。

1991 年、秀長亡き後、郡山城主となったのは豊臣秀保であったが、秀保が幼かったため高虎が後見役として、彼に仕えることとなる。高虎が築城に関する能力と技術を習得ていったのはこの頃と言われる。翌年、豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍（文禄の役）、水軍を率いて朝鮮に渡ったが、朝鮮出兵中、この頃から家康と頻繁に手紙のやりとり⁷⁾を行っていた。40 歳の頃、秀吉の直接の家臣となり、7 万石を与えられ、宇和島城主となる。慶長の役に参加、戦功により 1 万石が加増されて 8 万石の大名となった。

（3）徳川三代への忠誠

豊臣秀吉の死後、もう一つの大きな転機を迎える。時代は、豊臣ではなく徳川と見込んだ高虎は、徳川家へ仕官することとなる。そして、関ヶ原の戦いでは徳川家の先方隊を務め勝利に貢献した。築城家としての高虎の才能が発揮されるのはこの頃からである。この戦いの後、伊予今治藩主となり、後に日本三大水城⁸⁾の一つになる今治城の築城を開始した。49 歳で京都の伏見城の修築。51 歳の時には江戸城の修築に関わったが、天守および二の丸・三の丸を拡張した功績によりさらに 2 万石が加増された。

1608 年 8 月（53 歳）、徳川家康に伊賀・伊勢への転封を命じられ、石高は 22 万石であった。9 月に伊賀上野に、10 月には安濃津に入城した。家康は藤堂高虎の才と忠義を高く評価し、外様大名でありながら譜代大名格として重用した。56 歳の時には、二条城で徳川家康・秀忠会見の接待役をこなし、その後、家康の命で肥後熊本藩の監督に赴いた。1614 から 1615 年は豊臣氏との最終決戦、大

5) 現在の滋賀県長浜市。

6) この頃（高虎が 30 歳の時）、徳川家康が京都に屋敷を築くことになった時、「次の時代は家康だ」と直感し、家康のため高虎は実費で門を造営した。家康は高虎の造った建物と配慮に感激し、徳川家康は感謝のしるしとして刀を贈ったと言われる。

7) 家康は高虎のことを、この時から信頼していたと言う。

8) 今治城、高松城、中津城である。

阪冬の陣と夏の陣に参戦し、その戦功により、伊5万石が加増され、石高は27万石余となった。

大阪夏の陣があった翌年、ついに徳川家康が没した。その時の遺言が「天下に大事ある時は一の先手を高虎」「藤堂家は末代までも伊賀・伊勢から動かしてはならない」という高虎に対する絶大な信頼を示した、と言われる。そして、家康は死ぬ間際、高虎を枕頭に招き深く感謝し、そして高虎の方も家康への感謝と徳川家への忠誠心を示した⁹⁾と言われる。そして家康の遺言を忠実に守り、日光東照宮造営に関わり約半年で完成させた。

その後、第二代將軍秀忠、第三代將軍家光に仕えた。60代で、大阪城の改修、二条城の改修、上野寛永寺の造営、京都南禅寺山門の寄進などの徳川家の重要な事業に関わった。1630年10月5日江戸の藩邸で没し、江戸上野の寒松寺に葬られた。享年75歳。

(4) 築城家としての高虎

藤堂高虎は最初から築城の技術に長けており、天才だと思われがちだがそうではない。武力に長けていた藤堂高虎は幾度もなく戦場に向かい、たくさんの城を攻め、敵と戦ってきた。そんな中、もし、自分が城にいてどういう所が、どういう方法で攻められるのが一番守りづらいか、逆の立場で考えることによって、守りが最強に固い城にするために、様々なアイデアを貯めていったと言われる。高虎に関わった築城やそれに関する事業を、表2に示す。

表2. 高虎に関わった城や建築物

年号	城・建築物など
1585	丹波・出石城
1586	大和・郡山城
1587	京都・聚楽第（縄張り）
1587	紀伊・猿岡山城
1594	京都・伏見城（秀吉の命により助工）
1596	伊予・宇和島城
1597	伊予・大洲城
1601	近江・膳所城（築城助工及び縄張り）
1602	伊予・今治城及び伏見城の修理助役
1606	江戸城大修理の縄張り
1608	伊勢・津城の大改築及び伊賀上野城の大改築
1609	丹波・篠山城
1610	丹波・亀山城の普請の手伝い
1617	日光東照宮の造営奉行
1619	京都・二条城の縄張り及び和歌山城の石垣工事
1620	大坂城の修復
1623	山城・淀城築城の普請を手伝う
1628	京都・南禅寺に三門を造営・寄付

出典：「藤堂高虎の築城」より

9) 家康は死に際し「そなたとも長い付き合いであり、そなたの働きを感謝している。心残りは、宗派の違うそなたとは来世では会うことができぬことだ」と言い、その家康の言葉に高虎は「なにを申されます。それがしは来世も変わらず大御所様にご奉公する所存でございます」と言ったとされる。

2. 代表的な城郭

高虎に手がけた城は数多くあるが、領地という観点からすると以下の三つに分類される¹⁰⁾。一つは自分の領地に築いたもの、二つ目は自分以外の領地に築いたもの、三つめは自分の領地ではない場所に築かれ、なおかつ補助的な立場に関わった城である。ここでは主に、一つ目の自分の領地に建てたもの、つまり居城として築いたものから代表的な5つの城郭を選び、その特徴について記していきたい。

(1) 今治城

1604年に築城。この城の大きな特徴は、三重の堀に海水を引き入れた特異な構造である。このことにより、海から堀へ直接船で出入りすることができるなど海上交通の要所である今治を、最大限に活用した城である。藤堂高虎ならではの、見せる城ではなく、戦う城に特化した城といっても過言ではない。

籠城戦を行うためには、まず城に入れないことが重要なのであるがそのための工夫がある。例えば、石垣の高さ（図1と図2参照）。築城当時は、全国に築かれた城の中ではトップクラスの高さであった。ただ、このような高い石垣を造ろうとすると莫大な量の石が必要となってくる。そこで、大量の石を集めるために一計を案じたのが「石と米を交換する」といった政策であり、このことにより必要な量の石を短期間で集めることができた¹¹⁾のである。また、石垣を登って攻めてこられないような工夫として、堀の長さを50メートルと大変長くしたのも特徴的である（図2参照）。これだけの長さであれば、名人であっても弓矢で射当てる確率が格段に下がる。巨大な石垣と長大な堀によって、戦意を喪失させる狙いがあったと言われる。



図1. 今治城

出典：「愛媛県観光ガイド」より



図2. 今治城の堀

出典：「夜の今治城」より

10) 「築城の名手 藤堂高虎」 <http://members3.jcom.home.ne.jp/tshibal11/colum16.html> による。

11) 石がある程度集まった時点で米との交換を打ち切った。米を目当てに必死で瀬戸内の島々から石を探し、運んできた人たちは、時間だけを費やしたと怒る人も少なかった。

また、他にも攻められ難いしかけが見られる。今治城の各門は鉄御門（くろがねごもん）と呼ばれる扉の表面に鉄板を隙間なく張り詰めている門¹²⁾を備えている。鉄砲や火矢による攻撃に耐えられるため、正面突破されにくい造りになっている。城には虎口と呼ばれる入口があり、他の入口と同様、大きな黒鉄門が備えられている。高虎は、まず堀から攻められることはないと考えたので、この虎口の防御を重視し、特殊な構造にした。つまり、門の内側には四角形のスペースを設け、仮にこの門が突破され敵が侵入してきたとしても、そこに閉じ込め四方から弓、石、鉄砲で攻撃できるという構造にした。この構造は他の城でも見られるのだが、日本初の仕掛けであった。



図3. 今治城の鉄門
出典：「僕の旅人探検記」より

（2）宇和島城

この城の前身は板島丸串城と呼ばれていたが、いつ築城されたかはよくわからない。宇和島城と呼ばれるようになったのは江戸時代に入ってからのもので、1596年に高虎によって近世独特の城郭として、築城された以降と言われている（図4参照）。宇和島城は山頂に本丸、そしてそれを囲む二の丸と、麓に三の丸が配置された梯郭式平山城である。

この城が何よりも特徴的なことは、城の外郭がいびつな五角形をしていることである（図5参照）。これは、外部から侵入しようとした敵に城郭を四角形だと思わせ、攻撃の坎を鈍らせるという狙いがある。つまり、城を攻める側は当然、四角形であると考え攻めてくるわけだが、実際には五角形なので一辺が空になる。城を攻める側にとって、そこは完全に死角になってしまう。この一辺は、敵の攻撃を避けるだけでなく、敵を攻撃する出撃口ともなり得るし、さらに物

12) こうした鉄が張られた門は、織田信長が初めて安土城で建てたと伝えられている。良いものをすぐに取り入れるのも藤堂高虎の特徴ともいえるだろう。

資搬入口ともなり、城から落ちのびる場合際の抜け道ともなる¹³⁾。これは城を守る上で、効果は絶大なものといえるだろう。寛永の頃、四国に築かれてある城郭を幕府の隠密が巡視した際に、宇和島城に関する報告書にはその見取り図が四角形で描かれていた。当時の築城術で、このようなからくりを用いた城は他にはなく、まさに築城家としての高虎の才能が十分に発揮された名城と言える。



図4. 宇和島城天守
出典：「宇和島観光ガイド」より



図5. 五角形の縄張り
出典：「Wikipedia」より

(3) 伊賀上野城

伊賀は忍びの里としてとても有名な所である。1603年8月、関ヶ原の戦いの後、徳川家康は高虎に、伊賀の国10万石、伊勢の国10万石、伊予の国2万石、合わせて22万石を与えた。高虎が家康の命で伊賀・伊勢に移ってきたのは、来るべく大坂の豊臣氏との決戦に備えたもので、それだけに家康の信任が厚かったと言える。この城は前城主筒井定次によって豊臣氏を守るための大坂城の出城として築かれたのに対し、今度は大坂を攻撃するための城として高虎によって築かれた。1611年に、大手門の位置を南側に配し、本丸を西に拡張、巨大な堀を作ると共に高さ約30メートルという日本一の高さを誇る石垣をめぐらした。しかし、大坂冬の陣、夏の陣と共に徳川の勝利で終わり、伊賀上野城は天守が造られないまま築城は未完に終わったと言われている。

13) 本丸天守から、原生林の中を抜ける間道が数本あり、西海岸の舟小屋、北西海岸の隠し水軍の基地などに通じていた。



図6. 伊賀上野城天守
出典：「Wikipedia」より

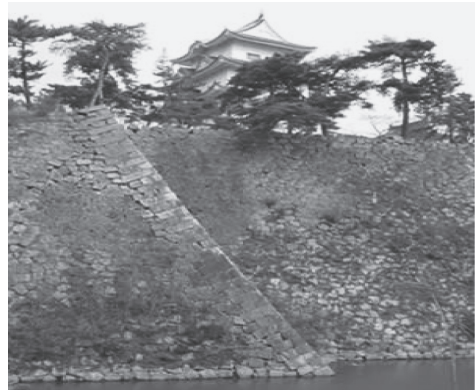


図7. 伊賀上野城の石垣
出典：「伊賀上野城 HP」より

高虎は、城の大改修を行なう際に、平時の居城は津城、有事の居城は伊賀上野城と考えていたという。大坂で何かがあったらすぐに迎えうつ、大坂から攻められても守り通せるよう、戦える城に造り替えた。伊賀上野城は守る城、戦う城としての役割を果たしたのである。日本で一番高い石垣と 標高の高い伊賀上野の地に建つこの城の堀に水を引いてくる。城の四方に川が流れるという自然の地形も含め、さも要塞かのような城はなかなか攻めづらいものであったろう。伊賀上野城は、ある意味、高虎の築城技術が一番出ている城と言っても過言ではないのである。

(4) 津城

津城は以前、安濃津城と言われていた。ここは関ヶ原の戦いの前哨戦である安濃津城の戦いがあった場所で、この城の城主豊田信高とその兵 1,700 人に対し、毛利秀元を中心とする 30,000 人の軍勢が激突したのである。ただ、さすがに兵力の差は明らかで、豊田信高側はすぐに負けてしまい、津城は見るも無残な形になってしまった。

そこで登場したのが高虎である。高虎は 1608 年に伊予国の今治から伊賀・伊勢国に移ってきたのだが、先ほど述べた伊賀上野城を同じ時期に、この城を近代城郭として大改修を行った。最強の防御を誇る伊賀上野城、戦うための城というよりは住むための城として津城を築いたのである。住むための城とはいえ、事があった時のために、石垣は少し高くしたとも言われている。高虎による大改修された津城は、その後、津藩の藩庁となった。



図8. 津城の丑寅櫓
出典：「Wikipedia」より

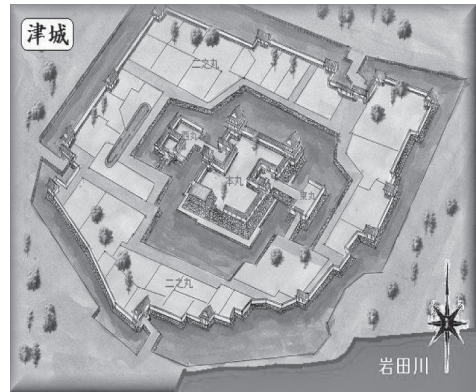


図9. 津城とその周辺図
出典：「津城 余湖」より

(5) 篠山城

篠山城は1609年に、天下を安定させるために徳川家康が、高虎に築かせた城である。この地は山陰道の要衝であり、豊臣方の拠点である大坂城を包囲するとともに、豊臣家ゆかりの西日本の諸大名を見張るためであった。

高虎が手がけた城は多いが、その中でも籠城戦を行うのなら、最も優れている城といっても過言ではない。ここは高虎の得意とする地の利を活かした水上の城で、敵が上るのをあきらめさせるような石垣、正面から突破しようとしてもそれをいとも簡単に押し返すかのような鉄門といった高虎建築の結晶ともいえるかのような城である。しかしそれだけではない。鉄門と表門の間にあった中門、両脇の石垣の上にあった埋門、鉄門が越えられても中門、表門、さらに埋門があり、まさに鉄壁という名にふさわしい城である。美しさよりも戦うことに重点を置いた、合理的な城、それが高虎の城造りの思想なのである。

ただ、これだけの構造だけなら伊賀上野城の30メートルもある日本一高い石垣のほうが鉄壁ではないのかと思う人も多いだろう。しかし、私がこの城を鉄壁の城と感じるにはそれだけの理由がある。それは、この城が三つの「馬出し」を備えているという点で日本有数の城だからである。普通は虎口（城の出入り口）が戦いの最前線となるが、「馬出し」は事前に虎口の外側を守る必要から工夫された防御構造の一つで、虎口の前面や、時には堀に架かる橋の外側に据え付けられ、防御・出撃の拠点となるものである。名前の由来は、この内側に騎馬武者がそろって、先に打って出たことからこの名がついたとも言われる。門が破られる前に敵の主力をつぶしてしまおう、といった高虎の考えが反映されている。篠山城は高虎建築のすべてが詰まった城であり、鉄壁の城と言ってよいのではないか、と思う。



図 10. 篠山城
出典：「篠山環境情報」より

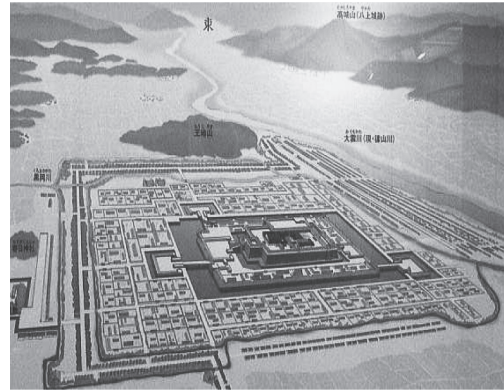


図 11. 篠山城の図
出典：「時代劇ロケ地探訪」より

3. 築城における特徴

築城の名手と言えば、加藤清正をあげる人も多いだろう。清正は、前線基地としての小規模なものや、それへの中継基地としての中規模なものを得意とした。その一方、高虎は前パートでも見てきたように、自分の本拠地や政治の機能を持つ大城郭にその力を発揮したと言われる。このパートでは、大城郭を得意とした高虎の城造りの特徴とその独創性について記していきたい。

(1) 難攻不落と言われた石垣の高さ

高虎の城と言えば、最初に思い浮かぶのがやはり石垣の高さであり、先に述べた伊賀上野城の 30m もある石垣の高さが良い例である。伊賀上野城の高さとまでいかななくても、高虎が築いた城の石垣の高さはすべてにおいて高いと言われる。なぜ、そこまで高い石垣にこだわったのか。

それは、彼自身が足軽も経験してきた戦士であったことと大きく関係している。高虎の築城の才能は、武士として戦ってきた中で培われそして磨かれていったのである。逆の立場で考えれば、どんな城が攻められ難いのか、そのことへの答えを追い求めているうちに、試行錯誤しながら実際に図面を引いてみる。どうやら、その経験が築城の名手と結びついている。そして、最初に思いついた一つの結論が、そびえたつ壁のような高さを持つ石垣であった。そして、造り出されたのが伊賀上野城や今治城である。今治城では石垣を作る石が無くなれば、島まで取りに行かせたというぐらいだから、高さへのこだわりは相当なものであっただろう。そこには、相手に戦意を喪失させる、つまり戦うことによってどちらも命を失わせない、そういう彼の精神が息づいている。

（２）弓の名手が苦勞する堀の長さ

高虎が築く大きな城には高い石垣が造られることが多いが、その石垣と対になって城を防御するのが堀である。外堀としては自然の地形を利用とした川、また、中堀や内堀は、それらの川から水を引き入れる場合が多い。今治城では、外堀の一つが海に相当しており、海水を引き込むことによって50mの幅のある堀となっている。なぜ50mもある長さなのか。それは当時、戦いと言えはまだ刀や弓が主流である時代、高虎は弓矢の射程に入らない堀を作ろうと考えたのである。当時、そのようなことを考える人はいたのであろうが、それを実行した人となると高虎くらいであった。50mは弓矢が届く限界の距離で、弓の名手でもその距離を超えると格段に命中率が下がる（当然、鉄砲でも命中率は下がる）。まさに、弓が届かない城など、攻める前に攻めようとは思わない。戦意がくじかれる。石垣の高さ同様、戦いを起こさない城という発想は、高虎ならではの発想である。

（３）トリッキーな構造

城を造るには縄張りが必要であるのは言うまでもない。縄張りとはその城を造る土地のことで、一般的な城と同様、方形のものを基本とし比較的シンプルに区画したと言われている。ただ、時には、宇和島城のように縄張りを五角形にして、敵を欺くような形にした。地形がそれに適していたというより、軍備上の都合から、元々五角形の構造を考えていたのである。

また、今治城の虎口に備えられた黒鉄門とその後ろのスペースにある仕掛けである。先ほども述べたが、鉄門の後の四角形のスペースに敵が侵入してきても、そこを四方から石や弓などで、行き詰った敵を迎え撃つことができる。この仕掛けは、他の城でも取り入れられるようになったが、これを実現化したのは、高虎が最初である。高虎は先を見越し、敵が遭遇したこともないトリッキーかつ大胆な仕掛けを仕組んだ城造りを行ったのである。

（４）機能重視の層塔型天守

天守の形には二種類ある、つまり望楼型天守と層塔型天守である。望楼型天守とは安土城や彦根城のように下層の建物の上に望楼と呼ばれる小さな建物をのせた様式のこと、破風などの装飾があるので見かけが城らしく美しい。その反面、それらの装飾ゆえに死角の部分ができやすいのが欠点である。

一方、層塔型天守とは、二条城や江戸城がその良い例で、下層から上層までデザインに一貫性がある多宝塔のような構造で、つまり下層と同じ構造でやや小さめのものを上層に乗せていくというようものである。実は、この層塔型天守を初

めて造ったのが高虎と言われている。見た目の派手さや美しさには欠けるが、天守の上から戦全体がよく見下ろせる造りで、この型の天守を造るのを得意としていた。視界を良くするために層塔型天守を造った高虎は、ただものではないだろう。

4. 築城に見られる高虎の理念

(1) 津城と周辺の都市計画

関ヶ原の戦いそのものは一日で終わったが、徳川家康対石田三成の戦いはそれ以外の各地で行われていた。安濃津城の戦いもその一つで、結局は籠城していた豊田信高が負けたのであるが、安濃津城の痛みはひどいもので、人が住むことができない状態であった。豊臣氏との決戦に向けて、伊賀や伊勢国は重要な拠点と捉えた徳川家康は、築城の名手であり、かつ関ヶ原の戦いで結果を残した藤堂高虎に目を付け、安濃津城の再建とその周辺の街並み¹⁴⁾を復興するよう、高虎に命じた。

高虎は、城の再建はさておき、どうすれば人々の集まる大きな城下町を形成することができるのか、真剣に悩んだ。まず城の周辺に武士を住ませわせ、さらにその周辺の地域に町人たちを呼びよせる計画を立てた。そして多くの町人が集まったことで、人口は以前の3倍に増えたのである。しかし、それだけでは経済的に活気のある城下町にはなりえない。それゆえ、高虎はこの城下町を伊勢街道¹⁵⁾の宿場町にしようと思いついたのである。当時、このあたりには宿場町がなかったので、伊勢神宮にお参りに行く人々には有難られたようである。そうすることで町は活気を取り戻し、町人たちの商売も大繁盛した。このようにして、津城とその周辺の都市形成は着々と進められていった。

町のインフラ整備では、人々が不自由なく生活できるよう、城下町全域に水が流れるようにした。城の北側、西側、南側に武家屋敷を配置し、東側を宿場としたと言われている。そこに堀川とよばれる新たな川を掘り、町の南側に流れている岩田川から水を引き込むことで、物資の運搬が快適にできるようになった。また高虎は、伊勢街道のルートを城下町の内側を通るよう変更、宿場町に必要な食材、生活物資が陸からも届きやすいようにしたのである。城下町は住みやすく便利な町になったが、高虎の知恵が結集した都市形成であった。

高虎は、何よりも皆が不自由なく生活できることを第一に考えていた。築城の名手のという言葉の裏にはこのような面があったことも知ってほしいと思う。

14) その時、500軒ほどのボロボロの家しか残っていなかったと言われる。

15) 伊勢神宮への参拝するために通る道のこと。

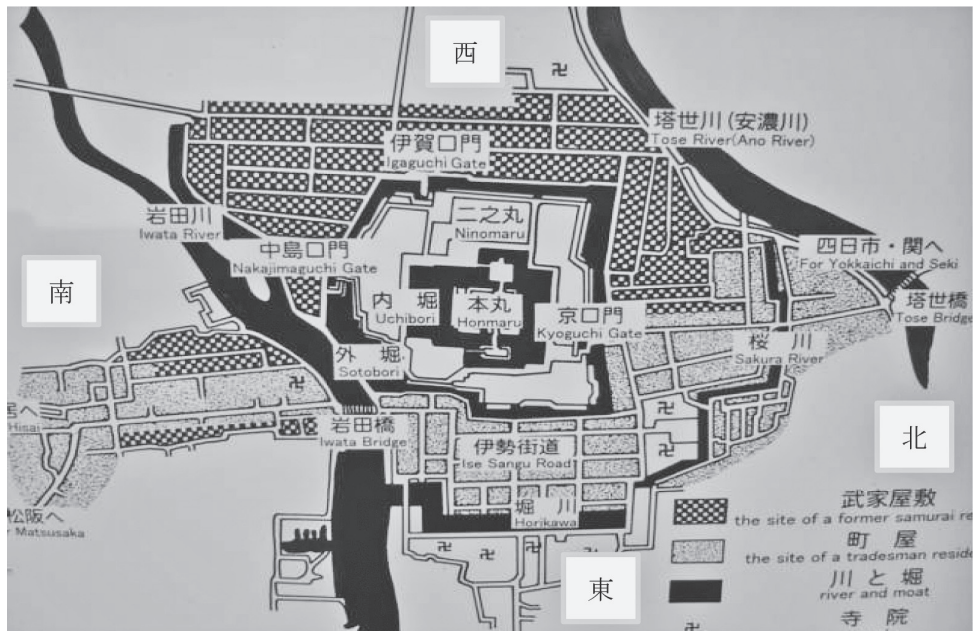


図 12. 津城と城下町周辺

出典：「津城－三重県－～城と古戦場～」より

(2) 高虎の理念

高虎によって築かれた城を見ていくうちに、藤堂高虎という人物の本質に気付いた。それは、自分に厳しく他者に対して優しい、そして城主として民を愛することができるそんな人物ではないかと。やはり注目すべきは、なぜ、あれほどまでに鉄壁の守りを備えた城を造ろうとしたのか。敵に攻められる前に、敵に攻めさせない城をスローガンにしてきたからである。敵がいくら考えても落ちない城を造り出し、命を落とす人々を一人でも減らす。こういったところに、高虎の人を思う気持ちがにじみ出ているように思う。

また、高虎は豊臣家に仕えている時、いくつかの城の築城を命じられた。その中で高虎は常に城の設計図を二つ書いたと言われている。自分のための城ではない、主君が住む城なので、その二つの中から主君に気に入った方を選んでもらうためである。そうすることで、城造りの手柄は主君のものとなる。そこには確かに世渡り上手と言われたほどのしたたかさも見えるが、逆に言うと、主君を喜ばせるため、きっちりと主君を立てたいという律義さも出てくるのである。

以前、高虎は血の気の多い荒い武子であった。戦いでは先頭に立ちどちらかといえば命を落としても構わないという戦いをしていた。なぜ、そのような人が他者のことを考え思いやりのある武将になっていったのか、それは、多くの戦場に出向き多くの仲間や家臣を失ってしまったのが原因であろう。その経験を経て、

仲間を失わせないという理念、また無駄な戦いによって敵であっても命を落とすべきではないという理想、どうも高虎の城造りにはそのような理念が表れているのではないか、と思う。高虎は戦いが無い平和な国を考えた第一人者かもしれない。

Ⅲ 結論

高虎が、なぜ築城の名手と言われるのか。それは城造りにおいて、百戦錬磨の経験と従来にない彼独自の発想を活かした城造りを行ったからである。彼が築いた城の多くが難攻不落の城であった。無論、それは軍事戦略上の拠点を強固にすることによって主君を守りたいという思いもあったであろう。しかし、それだけではない。敵に戦意を失わせるという城造りには、仲間を失わせはしないという強い思いのみならず、無駄な殺戮は避けたいという敵を思いやる気持ちさえも表れているのである。彼はすぐに武功をあげられるほど強い戦士であったのは言うまでもないが、ただ、それだけではなく、何よりも人のことを考えることのできる、優しさを持ち合わせていたのである。

武士を志して以来、主君に役立つためには何をすればよいのか、また大名になった後は民を守るためにはどうしたらよいのか考え続けた。名をあげる間は何度も挫折し、無銭飲食を強いられるほど地のどん底にまで落ちた経験があったからこそ、弱い者の立場にも立てることができたのであろう。高虎は、一般的に主君を何度も変え、出世上手というイメージでとらえられているが、それは一面でしかない。「御恩と奉公」で表される君主と家臣の関係。高虎が仕えた初めの方の主君は、「御恩」をまったくといってよいほど与えず「奉公」のみを求める主君であった。だからこそ、自分の力を分かってくれる主君を求めたのである。この惨めな経験こそ、目下や部下を思いやる源になっていたと考えられる。

この精神は、家康政権誕生後の津城とその周辺の都市形成に見事にまで表れている。荒れ果てた城と町の復興のため、高虎は頭を悩ました。人々が便利で暮らしやすい町にするため、新たな川を掘り、伊勢街道のルートを変更して宿場町を形成、町を活気づけさせることに成功したのである。

今の若者の多くは、粘り強さが無い、失敗したらすぐに挫け現実に目を向けようとし無い、などとよく言われる。若者である私もそう思う。高虎は、結果を出しても評価されることのない辛い現実にめげず、常に前向き志向で歩み続けてきた。辛い経験を、他者を思いやる気持ちに変え、民にも真摯に向き合う。高虎の生き方は、社会に出ていく我らに生き方を教えてくれているように思う。

【引用文献・参考文献】

- 阿部龍太郎 (2006) 『生きて候 上』 株式会社集英社
阿部龍太郎 (2006) 『生きて候 下』 株式会社集英社

【引用サイト・参考サイト】

- 「津市 文化振興課－津藩祖 藤堂高虎」
<http://www.info.city.tsu.mie.jp/modules/dept1171/article.php?articleid=626>
- 「築城の名手藤堂高虎攻城団～日本には城がある」
<http://kojodan.jp/blog/story/175.html>
- 「築城の名手：藤堂高虎」
<http://members3.jcom.home.ne.jp/tshiba111/colum16.html>
- 「築城に異常な関心と情熱を燃やした武将・藤堂高虎」
http://www.bell.jp/pancho/k_diary-2/2009_02_28.htm
- 「津の発展と築城の名手・藤堂高虎－三重の文化」
<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/arekore/detail.asp?record=9>
- 「今治城 | 今治市 文化振興課－今治市の文化施設」
<http://museum.city.imabari.ehime.jp/imabarijo/>
- 「伊賀上野城 (伊賀文化産業協会)」
<http://www.ict.ne.jp/~uenojo/>
- 「伊勢津城」
<http://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/tu.htm>
- 「丹波篠山城」
<http://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/sasayama.htm>
- 「津城－三重県～城と古戦場～」
<http://www.geocities.jp/zanyphenix/shiro466.html>
- 「藤堂高虎～主を7回も変えた猛将で水軍指揮も取れる築城名手」
<http://senjp.com/takatora/>
- 「戦国の転職王・藤堂高虎 その姿は現代社会でも働く男たちの理想なのか」
<http://bushoojapan.com/tomorrow/2013/10/04/6956>
- 「天守用語解説」
<http://www.lint.ne.jp/~uematsu/yogokaisetu1.html>
- 「天守」
<http://www.geocities.jp/qbpb900/sub3.html>
- 「モチを無銭飲食した藤堂高虎」
<http://reki.hatenablog.com/entry/2014/09/27/>
- 「築城の名手 藤堂高虎」
<http://members3.jcom.home.ne.jp/tshiba111/colum16.htm>
- 「愛媛県観光ガイド」
<http://www.tabitm.com/point/1380590/>
- 「夜の今治城」
<http://blog.goo.ne.jp/ishiya833/e/5c258857e4311eccde29d71fc2377d3b>
- 「僕の旅行探検記」
<http://mildcafeaulait.blog.fc2.com/>
- 「宇和島観光ガイド」
<http://www.google.co.jp/url?sa=i&rct=j&q=&esr~>
- 「宇和島城 Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%87%E5%92%8C%E5%B3%B6%E5%9F%8E>
- 「伊賀上野城 Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E9%87%8E%E5%9F%8E>
- 「伊賀上野城 HP」
<http://igakanko.net/index.php?%E4%B8%8A%E9%87%8E%E5%9F%8E>
- 「津城 Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B4%A5%E5%9F%8E>

「津城 余湖」

<http://homepage2.nifty.com/yogo1394/mie/tusi.htm>

「篠山環境情報」

<http://tourism.sasayama.jp/rekishi/cat59/>

「時代ロケ地探訪」

<http://agua.jpn.org/film/fl58.html>

【映像資料】

NHK「先人たちの底力 知恵泉」藤堂高虎 2015年9月29日放送